

◆◆◆ 「ツアーガイドのための気象学講習会」の講師を担当して

小笠原村では、小笠原村産業観光課、小笠原村観光協会など、観光業に関わる様々な団体により、陸域のガイド制度の実施に向けた取組みが行われております。その一環として、ガイド養成のために必要な講義研修も進められており、この度、「ガイドのための気象学」について講習を担当いたしました。

小笠原諸島は、本州から南南東に約 1,000km 離れた太平洋上にある 30 余の島々で、概ね週 1 便運航する「おがさわら丸」で、東京港（竹芝桟橋）と父島（二見港）が結ばれています（25 時間半）。理科の教科書で、夏の高気圧を「小笠原高気圧」、気団を「小笠原気団」と呼ぶように、夏の高気圧で特徴づけられる小笠原の気候は本州とは大きく異なります。

今回の講習は、竹芝旅船ターミナルと父島および母島の講習会場をテレビ電話でつないで行われました。各会場では、事前に送信しておいたパワーポイントのスライドを、父島ではプロジェクターに、母島では個別のパソコンで映しながら、音声とコマ送りの画像を順次送信し、現地からも音声とコマ送りの画像を送り返す方法で進められました。

筆者が担当した講習は、月曜日の午後 7 時 30 分から午後 9 時までと遅い時間にもかかわらず、両島で 10 名を上回る受講者があり、講習の終了後も、島で起こる気象現象、観天望気のキーポイントなどに多くの質問が寄せられ、内容の濃い講習会となりました。

小笠原諸島は、夏は亜熱帯の気候、冬は低気圧や前線の影響を受けますが、本州よりかなり南に位置することから、メソスケールなどスケールの小さな現象がより卓越しやすく、天気予報が難しくなります。加えて、にわか雨が多い土地柄にもかかわらず、雨雲を直接とらえることができるレーダー観測がないことから、ガイドツアーの最中に急な雨にあうなどの経験も多く、受講者のみならず島の方々が、天気予報と天気の現象そのものに関心が高いとのことでした。

講習では、「小笠原の気候の特徴」、「大雨や強風の多い時期とその原因」、「統計的に晴れが多い日・雨が多い日」、「台風情報の見方」「気象衛星画像の見方」「急な天気の変化の予兆（観天望気のポイント）」についてお話しし、小笠原の気象についてさまざまな視点から講習生の方々と情報を共有できたと思います。

現地ガイドの講習は、可能であれば、現地で数日間行動をとるとし、現地の方が感じている疑問、現象などについて議論しながら講習内容を練り上げて行くことで、より実際のテキストとなりますが、基本的な情報をお伝えすることで、ガイドを行う上での基礎的な知識は伝えることができましたと感じています。

小笠原は、航空便がないだけに、訪れる人がそれほど多くなく、自然が良く保存されていると伺いました。小笠原ならではのホエールウォッチは春がもっともお勧めであること、夏は 6 月下旬の梅雨明けから 7 月にかけて、最も天気が安定すること。また、1 年を通して空気が澄んでおり、昼だけでなく夕陽や星空もとてもキレイであることなど、是非とも訪れたい小笠原の魅力も、講習後にたくさん伺いました。

講習の機会を通して、違った地域の気象について勉強することができ、また、受講者の方々と情報を交換することで、気象情報の利用方法について再考する良い機会になったと感じています。機会があれば、現地の気象を体験しに、是非訪ねてみたい。最後に、講習に先立ち様々な資料を提供頂いた小笠原村の関係者、受講者の方々、本講習をコーディネート頂いた日本交通公社の方々に、この場を借りて、御礼申し上げます。

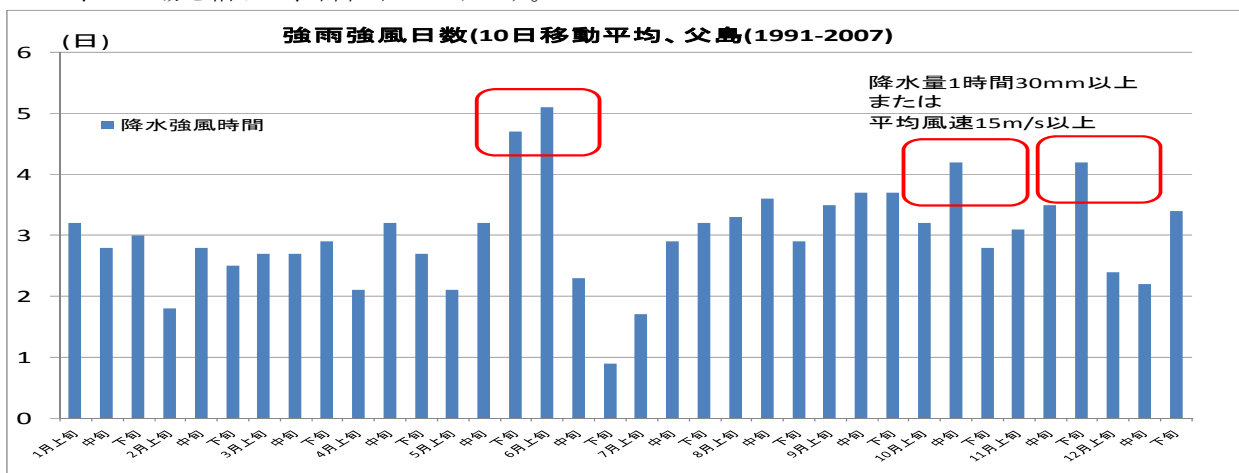


図 父島の強雨強風日（1時間降水量が 30mm 以上、または、最大風速が 15m/s 以上の日）の平均日数。梅雨末期の 5 月下旬から 6 月上旬にかけて、前線や台風の影響を受ける 10 月中旬、低気圧や前線の影響を受ける 11 月下旬で強雨や強風の日数が多く、1 月下旬～2 月上・中旬と 3 月上・中旬は強風の日が多い。反対に、6 月下旬から 7 月上旬は天気が安定する。